

特集2：彦根市河原町芹町伝統的建造物群保存地区

重伝建選定記念シンポジウム 重伝建とまちづくりを考える

平成28年11月20日（日）、彦根景観フォーラムは、河原町芹町美しいまちづくり委員会、彦根市、彦根市教育委員会、まち遺産ネットひこねと共催で、鳥羽や旅館を会場に、「彦根市河原町芹町伝統的建造物群保存地区・重要伝統的建造物群保存地区選定記念シンポジウム」を開催しました。

シンポジウムでは、「重伝建とまちづくりを考える」をテーマに、前半は文化庁下関調査官と彦根景観フォーラム理事長・濱崎滋賀県立大学教授に講演いただきました、後半は、東近江市五個荘金堂地区のまちなみ保存会の取り組みを講演いただいた後、河原町芹町の代表者や関係者でパネル討議を行いました。今回は、後半の内容を特集します。

講演2 「まちづくりの取り組み」

NPO 法人金堂まちなみ保存会から3名が参加され、顧問の西村實（みのる）さんが、住民の視点から重伝建地区の金堂のまちづくりを紹介されました。

東近江市五個荘金堂地区は、平成10年12月25日に重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）に選定され、面積は32.2ha、伝統的建造物数303棟となっている。（河原町芹町地区は5.0ha、伝統的建造物数91棟）選定理由は、古代条里制地割を基礎に陣屋と社寺を中心に形成された湖東平野を代表する農村集落、近江商人が築いた意匠の優れた伝統的建造物群であり周辺の田園景観を含めて優れた歴史的景観を保存しているとされた。

まちなみ保存会の設立とあゆみ

金堂では、昭和60年代に滋賀県の景観形成モデル事業で、地域を流れる川を整備し水路に錦鯉を放流するなどの活動があった。平成3年、西村さんが五個荘町議員になり、愛媛県内子町で伝建の実態をつぶさに調査し、町に働きかけた。平



成7年4月には、「水と緑と条理に囲まれ伝統的建物が息づく近江商人のふるさと」をキャッチフレーズに、金堂自治会を主体に保存会を結成した。平成10年6月には40歳代を主体として青年部を設立、その年の12月25日に重伝建に選定された。

保存会は、7つの通りに名前を募集し、祭馬場通り、寺前・鯉通り、あきんど通り、天秤通り、堂中通り、陣屋通り、花筏通りと名づけ、近江商人宅の一般公開を担った。

平成17年2月に五個荘町は東近江市に合併した。合併前に、空き家であった近江商人本宅を保存会の活動拠点として五個荘町で購入したが、整備については行政の理解が得られなかった。このため、平成17年6月に「近江商人蘇生プロジェクトチーム」をつくり、10月に「(仮称)金堂まちなみ保存交流館設立準備委員会」を14名の委員（大学教授を含む）でつくり、いきがいの場、まなびの場、おもてなしの場を活用の3本柱とした活用案を提案。平成17年から3年がかりで市が保存修理を行い、平成21年の4月から保存会が管理委託をうけた。これと並行して、組織強化にとりくみ、平成19年3月に法人化した。

保存会の組織と相談活動

保存会は、現在、正会員148名、賛助会員が法人17社、個人11名で、理事長1名、副理事長3名、委員長4名の体制で、総務、事業運営、普及啓発、まちなみ景観の委員会を設けている。

最も重要なものが、まちなみ景観委員会の相談活動で、平成21年から伝統的建造物・非伝統的建造物の修理・修景の相談を受けるようになった。相談員は市の文化財保護課長など3名と、理事長、自治会長ほか7名で、月2回、相談物件について検討し問題のある物件には改善を要請している。保存会で相談を受けることで気軽に相談ができるようになり、以前は伝建に反対されていた方の理解も得られるようになった。また、空き家の修理や新築物件の修景でも大きな成果が出ている。ただ、基準と住民の要望の間で相談員が板挟みになるなどの課題もある。

相談の仕組みは、庭木を切るとか地面をセメントで固めるなどの小さな変更でも交流館に届けるように毎年、全戸にパンフレットを配布、5月に2年以内の

修理・修景で現状変更をする方は詳細を届けてくださいとお願いして、補助金を使用する・しないの仕分けをし、補助金を使う場合は相談会にきてもらい一緒に学習してもらおう。最終的には、市の審議会にかけて、現状変更許可を発行してもらっている。

次世代への継承活動、視察研修、広報

市の委託では、相談事業の他に、金堂まちなみ保存交流館の管理と、次世代にまちなみと伝統文化を継承する活動として小学生の体験学習を実施している。

館の管理は、ボランティアで毎日2名ずつ出してもらい、活動資金を補うため、かりんとうを近くの製造者から仕入れて販売している。体験学習は、平成18年8月から毎年実施し、平成28年は「金堂まち探検11、お宝をさがそう！」を実施した。平成24年7月には皇太子殿下の行啓があり、子どもたちにお声かけいただいた。また、市主催の「ぶらりまちかど美術館・博物館」（9月第4日曜）に協賛しており、毎年約2万人の来場がある。この他に、道路・河川の清掃と錦鯉の補充、先進地への視察・交流活動（平成8年から毎年1回）、全国伝統的建造物群保存地区協議会の総会・研修会に毎年参加している。平成23年は金堂で総会・研修会が開催され、全国から約250名が参加された。広報活動では、まちなみニュースを年3回発行、ホームページの作成、ブログの更新を随時行っている。

空き家への取り組み

課題としては、人づくり、次世代への継承とともに、空き家対策がある。

移住者を募集し、かやぶき農家を買われて修理され陶芸活動をされている事例や、プレハブ住宅を新築したいとの相談があり最終的に修理で対応いただいた事例がある。さらに、300坪の大邸宅を県職員が購入され、2年間の大修理を経て、移住された。

空き家対策として、平成25年に全国各地の所有者に訪問調査を行い、意向を把握した。その結果、36件のうち、このままが24件、売りたいが8件、貸家を希望が6件となった。世代交替で、遠く離れた家はどう愛着をもってもらうかが課題である。

パネル討議

「河原町芹町の美しいまちづくり」

河原町芹町のまちづくりのあゆみ

最初に、柴田いづみさん（結のまちづくり研究所代

表・滋賀県立大学名誉教授）が、まちのあゆみを説明された。

1997年2月に河原町で商店街組合、NPO、大学のコラボで



「寺子屋カ石」が再生され、定期的な談話室や学習教室、ギャラリー、紙甲冑教室などが開催された。商店街では紙飛行機の飛行距離を競う大会が始まり、ナイトバザール「百円で買える幸せ」も続いている。1998年、滋賀県立大学の学生グループACTが近隣の空きビルを活用してファッションショーなどを開催。2000年からは、商店街で「勝負（しょうぶ）市」が学生と商店主で始まった。2006年の「防災耐震まちづくりフォーラム」では、まち歩きやワークショップを行い、多くの市民と有識者の力を集めて寺子屋カ石の耐震改修を行った。

2007年の「彦根城築城400年祭」では、寺子屋カ石から生まれた「ゆるキャラ」が活躍し、2008年には、文化庁の調査官などにも講演してもらい、昔の写真を現在の景観と比べるワークショップなどを行った。その後、寺子屋カ石の活動が耐震グランプリ内閣総理大臣賞を受賞した。

さらに廃業された銭湯を改修して、第二ひこね街の駅「戦国丸」を再生、その後、第三ひこね街の駅を「逓信社」として、第四ひこね街の駅を「治部少丸」として再生した。こうした活動が人と人とのつながりを生み、多くの人による応援団ができて、その力が寺子屋カ石の火事からの再生で大いに発揮された。

一方、芹町は、河原町とは対照的な静かなまちなみで、歴史的に価値がある建物が多く残っている。かつては多くの商店があったが、いまは静かなまちなみに変わっている。

